

# アジアの風

ビジネスの先を読む



後藤 康浩 (ごとう・やすひろ)

亜細亜大学 都市創造学部教授  
早稲田大学政経学部卒、豪ボン大学MBA取得。1984年日本経済新聞社入社、国際部、産業部のほかパーレン、ロンドン、北京などに駐在。編集委員、論説委員、アジア部長などを歴任した。2016年4月から現職。アジアの産業、マクロ経済やモノづくり、エネルギー問題などが専門

## アジアのソフトパワーをどう高めるか

	2020年	2021年	2022年
1位	日本 (4)	日本 (2)	中国 (4)
2位	中国 (5)	中国 (8)	日本 (5)
3位	韓国 (16)	韓国 (11)	韓国 (12)
4位	シンガポール (20)	シンガポール (20)	シンガポール (20)
5位	インド (27)	タイ (33)	インド (29)
6位	タイ (32)	インド (36)	タイ (35)
7位	マレーシア (33)	マレーシア (39)	マレーシア (39)
8位	インドネシア (41)	インドネシア (45)	インドネシア (47)
9位	フィリピン (42)	ベトナム (47)	ベトナム (59)
10位	ベトナム (50)	フィリピン (53)	フィリピン (60)

アジア順位

	2022年			
1位	米国	6位	フランス	
2位	英国	7位	カナダ	
3位	ドイツ	8位	スイス	
4位	中国	9位	ロシア	
5位	日本	10位	イタリア	

世界順位

※ ( ) は世界順位

出典：英ブランド・ファイナンス社

英国のブランド・ファイナンス社が発表する国家の「ソフトパワー・ランキング2022年版」が発表された。これは国力を経済規模や軍事力ではなく、「親しみやすさ」「名声」「影響力」と、ビジネス、ガバナンス、文化、教育など「七つの柱」、さらに今回は「コロナ感染対応」を含めた五分野の指標で順位付けするものだ。ロシアのウクライナ侵攻で、軍事力など「ハードパワー」に再び世界の耳目が集まる中で、アジアのソフト

トパワーについて考えてみたい。22年版では米国がトップに返り咲き、2位が英国、3位がドイツとなった。大きな変化は中国が4位となり、5位の日本、12位の韓国を抜いて初めてアジアのトップに立ったことだ。コロナ対策が指標に組み込まれたことで、習近平政権の「ゼロコロナ政策」の評価が高まったが、中国は文化発信力、外交的な影響力の面でも力を増しているのも事実だ。外交面では「二帯一路」政策の拡大がある。

東南アジア諸国連合（ASEAN）で目立つのはシンガポール、タイ、マレーシアという経済発展で先行し、成熟段階に入った3カ国が横ばいだった一方、インドネシア、ベトナム、フィリピンの成長国がそろって順位を落とした。特に高成長路線を疾走しているベトナムが12位ダウンの59位に転落したのは、コロナ感染による経済活動の一时的低下はあるにせよ意外な結果だった。インドもコロナの打撃を受けながらもソフトパ

ワーの地位は維持している。重要なのは、経済成長一辺倒からソフトパワーの強化にも目を向けなければならぬ国がアジアでも確実に増えていることだ。外資の工場進出と輸出拡大から外交、教育、文化など独自の競争力を内発的に高め、新たな成長の力となければ「中進国の罠」は突破できない。ソフトパワーの指標には「デジタル化」やその国の料理や芸術が世界に広がっているかなども含まれている点は示唆的だ。日本では日本酒、食品、工芸品、コンテンツなどの輸出で、活性化している中小企業も増えているが、そうした「モノ」の中に文化や歴史などのソフトパワーを付加価値として盛り込めるかが利益を生むカギとなる。それは取って付けたような浅いストーリーではなく、守り続けている商品の原料、製法や根幹にある風土、習慣などを意味している。ウクライナ危機は、プーチン大統領による強引なソフトパワーの否定だが、ウクライナの人々はそれにソフトパワーで対抗しているようにも見える。